

患者を支え、過疎の町の復興に力を尽くす義肢装具製作会社

中村ブレイス 株式会社

島根県大田市大森町ハ132
従業員数：80人

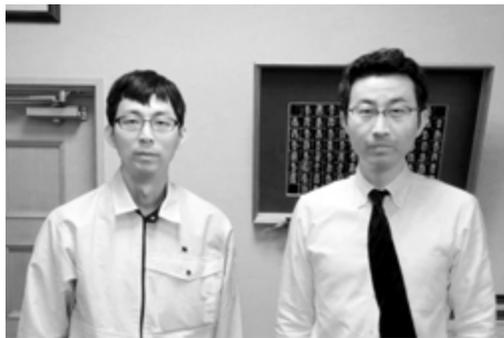
中村ブレイスは、アメリカで義肢装具製作を学んで帰国した中村俊郎なかもらとしろう氏が、故郷の石見銀山遺跡の町、大森町で起こした会社である。アメリカ仕込みの義肢装具づくりが評価され、さらに独自の工夫による装具規格品の製造販売により、会社は着実に発展した。町おこしにも力を注ぎ、2007年の石見銀山世界遺産登録にも尽力するなど、地域貢献活動も注目を集めている。昨年2月、中村俊郎氏は会長職に退き、現在は長男の中村宣郎なかもらのぶろう社長と次男の中村哲郎なかもらてつろう専務が会社を率いている。若いお2人に、この会社の成り立ちとこれからの義肢装具づくり、地域貢献活動について聞いた。

■ 俊郎氏のアメリカ留学

石見銀山の銀の採掘は、戦国時代から大正末期まで続いた。最盛期の江戸時代はじめには、ここから世界の銀産出量の3分の1近くが採掘されたといわれ、当時、この町の人口は、銀山で働く人たちのほか、彼らを取り締まる武士、銀を商う商人など20

万人を数えたといわれる。閉山後、人口は急減。そのさなかの1948年、2人の父、中村俊郎氏はこの町の旧家に生まれた。

この町を再び世界に誇れる町にしたい。そんな夢を抱きながら、俊郎氏は少年時代を過ごしたという。しかし、農地改革で財産を失った中村家には、俊郎少年を進学させる余裕はなく、18歳のとき、姉が勤務していた病院の医師の紹介で、京都の義肢装具製作所に就職した。最初からこの仕事に格別の思い入れがあったわけではない。だが、仕事にも勉強にも熱心な人で、出入りしていた大学病院の医師を通じて、当時の欧米の義肢装具づくりが日本よりも格段にすすんでいることを知ると、単身アメリカに渡り、現地の義肢装具メーカーで働く機会を



中村宣郎社長（右）と中村哲郎専務

得て、欧米流の義肢装具づくりを学んだ。

その頃の日本の医療現場では、義肢装具を必要とする患者の状態を医師が見て、義肢装具の仕様を決定し、義肢装具製作者は医師の指示どおりにつくるだけだった。しかし、アメリカでは朝鮮戦争やベトナム戦争で足や手を失った傷病兵が少なくなく、義肢装具士は、医師から紹介された患者1人ひとりと同様に、患部の状態を確認、計測し、型をとって、その人にぴったりの義肢装具をつくり、さらにその後のリハビリにまで関わりながら、義肢装具を最適の状態に調整していた。

そんな義肢装具づくりを経験する中で、俊郎氏は患者の痛みや苦しみに共感を深め、この仕事を通じてこの人たちを支えたいとの思いを強くした。さらに、俊郎氏は渡米中に大きな交通事故に遭遇した。自転車で走行中に、車に当て逃げされたのである。もはや手の施しようがないと医師から見放され、霊安室に安置されているときに、幸運にもそこで意識が戻り、奇跡の生還を果たした。一度失った生命を再び与えられた。それに恩返しをしたい。そんな思いから、残された自分の人生を仕事と周りの人々への感謝に捧げたいと考えようになった。

■シリコンとの出会いと

装具の製造販売

1974年、俊郎氏は帰国し、故郷、大森で

中村ブレイスを起業した。「ブレイス (brace)」は、身体機能の一部を失った人々を「支える」という意味である。

大森の近くに整形外科病院は少なかったから、山陰の医療の中心地、米子まで3時間かけて車を走らせ、病院を回り、整形外科医やリハビリ医とつながりをつくって、仕事を請け負い、大森に持ち帰って義肢装具を製作した。アメリカ仕込みの知識・経験・技術に支えられた丁寧な仕事ぶりが、医師からも患者からも支持されて、会社は順調に発展し、従業員も少しずつ増えた。

創業から7年を過ぎたある日、従業員の1人が名古屋のプラスチック素材の見本市で見つけて持ち帰ったシリコン樹脂製の灰皿を見て、俊郎氏はこれで足底板（インソール）をつくってはどうかと思いついた。靴の中に入れて足のアーチの高さや傾きを調整するもので、それまでの足底板はプラスチックやコルク製だったが、シリコンなら触感が滑らかで変形しない。1年にわたる研究と試行錯誤の末、シリコン樹脂の独自の成型方法を開発。日本のほか米英独仏など9カ国の特許を取得し、シリコン樹脂製の足底板の製造販売をはじめた。

足底板のほか、コルセットやサポーターなど、失われた身体機能を補ったり、痛みを軽減するために身体に装着する器具を「装具」という。過度のスポーツによる障害や、逆に運動不足や高齢化による人々の身体機能の低下により、需要は大きくなっ



中村俊郎会長（中央）と宣郎社長（右），哲郎専務（左）



中村ブレイス本社

ている。義肢（義足，義手）が患者1人ひとりに合わせて受注生産されるのに対して，装具の多くは規格品での対応が可能で，同社は，シリコン樹脂製の足底板を皮切りに，各種規格化した装具の製造販売をはじめた。

ただ，義肢装具は販売後のアフターフォローが不可欠で，スーパーやドラッグストアに置いて売りっぱなしの販売をするわけにはいかない。そこで，同業の義肢装具製作所を通じて販売するという方法をとった。全国に500～600社といわれる同業の義肢装具製作所が，同社の販売代理店の役割りを担っており，現在，そのようにして販売される装具の売上げは，同社売上げの70%近くを占めている。

■モンゴルの少年の義足をつくる

売上げの10%を占める義肢のすべてと一部の装具は，病院に向いて医師から依頼を受け，1人ひとりの患者の状態を確認し，それに合わせて製作する。かつては戦争によって手足を失って義肢を必要とする

人が多かったが，近年は糖尿病や交通事故で手足を失うことが多くなっている。

評判を聞きつけた患者が，直接大森まで出向いてくる場合もあり，海外からの依頼を引き受けることもある。千葉望著『世界から感謝の手紙が届く会社—中村ブレイスの挑戦』には，火災によって両足を失ったモンゴルの少年のエピソードが紹介されている。草原で遊牧生活を送っていた少年が草原火災に遭い，生命はとりとめたものの両足を太ももから失った。かつてモンゴルで日本語を教えていた松江市在住の日本語教師を通じて，少年が「もう一度自分の足で草原に立ちたい」と願っていることを知った俊郎氏は，治療費・渡航費・滞在費の全額を同社で負担して，少年を大森まで招き，義足をつくり，リハビリまでさせた。

少年は再び草原に立つことができるようになった。しかし，馬に乗った遊牧生活への復帰は難しい。少年は，自分も義肢装具士を目指し，将来は中村ブレイスで働きたい…と言い，その夢の実現に向けて，俊郎氏はその後も支援を続けた。このエピソード

ドは、メディアを通じて世界中が知るところとなり、児童文学作家・村尾靖子氏の手によって『草原の風になりたい—義足で草原を駆ける少年の物語』（岩崎書店、1998）という本にもなっている。

2010年には、フィリピンのNGOから、先天性の四肢障害で義足を必要とする少年の義足づくりに協力してほしいという依頼があった。俊郎氏と一緒にベテランの社員1人と、当時、義肢装具士資格を取得したばかりの現専務の哲郎さんがフィリピンに飛び、義足づくりの様子をNHKが同行取材した。

義足は切断された断端を、その形に合わせて型どりしたアクリル樹脂製外ソケットに挿入して、身体と義足をつなぐ。内ソケットがシリコン製だから、断端は隙間なくぴったりと装着されるのだが、月収1万円の少年の両親には高価すぎた。そこで、俊郎氏は、アクリル樹脂製外ソケットの代わりに竹を使うことにした。俊郎氏のアドバイスにもとづいて、現地の竹職人が竹細工の義足をつくり、断端袋で周径を調節することで、竹の義足にぴったりはめられるようにした。この方法により、日本で数十万円かかる義足が6000円で出来上がったという。

■メディカルアート研究所

売上げは全体の数%に過ぎないが、中村ブレイスの名前を有名にしているものの1



義足

つに「ビビファイ」と呼ばれる人工乳房がある。乳がんの治療で乳房を切除することは、男性の想像をはるかに超えた大きな喪失感を女性にもたらす。1991年、俊郎氏は日本人女性のためにという思いから、オーダーメイドの人工乳房の製作を決意した。患者の残った乳房から型をとり、それを左右反転させた形をシリコンでつくって、中にスポンジを入れる。色は単色のベージュにした。

しかし、最初の製品は、十分に患者を満足させることはできず、どうしたら満足してもらえるか、なかなかわからなかった。女性スタッフを通じて患者の思いを探っていくうちに、患者たちが色も形もリアルな乳房の再現を望んでいることがわかり、片方の乳房と同じ色になるようにした。しかし、シリコンの上から色を塗れば、衣服でこすれて剥げ落ちてしまう。そこで、半



人工乳房と人工の手指, 鼻, 耳

透明のシリコンの裏側から筆で着色した。残った乳房の写真を撮り、どこまでもその色に近づける。透いて見える血管まで描いた。そこまでして、ようやく患者から、喜びの声と心からの感謝の便りが寄せられるようになった。やがて、同じ方法で、事故や病気で手指、鼻、耳を失った人のための「スキルナー」もつくられるようになった。

人工乳房や人工の手指、鼻、耳の製作工房は「メディカルアート研究所」と呼ばれている。義肢装具製品というよりアート作品に近いという理由からである。これらの製品の製作には、1つひとつについて何ヶ月も要し、莫大なコストがかかり、そのままでは個人の負担可能額を超えてしまう。そこで、安定した需要に支えられている規格化した装具部門の黒字から補填することで、個人でも負担できるレベルにまで価格を抑えているという。

■ 過疎の町から文化を発信する

事業成長の傍らで、俊郎氏は大森町の地

域の発展にも力を尽くしてきた。伝統的な町並みを維持しつつ、かつてのにぎわいを取り戻すため、会社の自己資金で、町並みの保存にも力を注いだ。取り壊される寸前だった他地域の歴史的建造物を大森に移築。さらに石見銀山の世界遺産登録にも力を尽くした。そうした努力が実って、2007年には世界遺産登録が実現した。石見銀山の名は再び世界に知られるようになり、全国各地から、さらに海外からも多くの観光客がこの町を訪れている。

空き家になった町屋を買い取り従業員の社宅としたり、歴史のある静かなたたずまいに魅かれてやってくる町外の文化人や芸術家に町屋を提供している。文化人たちは、絵画や工芸作品、音楽、映画など大森を舞台とした作品を世界に発信し、石見銀山の町、大森に向けた人の流れをつくり出している。

中村ブレイスの現在の従業員数は80人。社内結婚したカップルも多い。ほとんどが大田市内に住まいを持っているが、そのうち20人が大森町内に住んでおり、家族を含めると50~60人。大森町の現在の人口、400人の10数パーセントに当たる。大森小学校の現在の児童数は9人だが、大森町内の保育園の園児は23人に上り、この子供たちがやがて小学校に入学するから、大森小学校の生徒数はこれまでの減少傾向から一転して増加に転じる。

■もっと大きな人の流れを

つくっていききたい

「当社は、各地の病院とのつながりをつくることで、仕事を継続してきました。しかし、この分野では同業他社と競合関係になります。これまでと同じように病院との関係を広げていくのはだんだん難しくなる。それよりも、オリジナルの装具開発に力を入れていけば、同業他社との関係を深めることができ、最終的にはより多くの患者さんに喜んでいただくことができます。そういうものをこれからもつくっていききたい。

*本稿の執筆に当たっては次の図書を参考にしました。中村俊郎著『コンビニもない町の義肢メーカーに届く感謝の手紙』（日本文芸社刊、2011）／千葉望著『世界から感謝の手紙が届く会社—中村プレイスの挑戦』（新潮文庫、2010）



石見銀山世界遺産センター

それによって会社の基盤を強くして、その収益をこの町の発展につなげていきたい。石見銀山の町に向けて、もっと大きな人の流れをつくっていききたいと考えています」

宣郎社長と哲郎専務から、最後にそんな言葉を聞いて、この日の取材を終えた。

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中